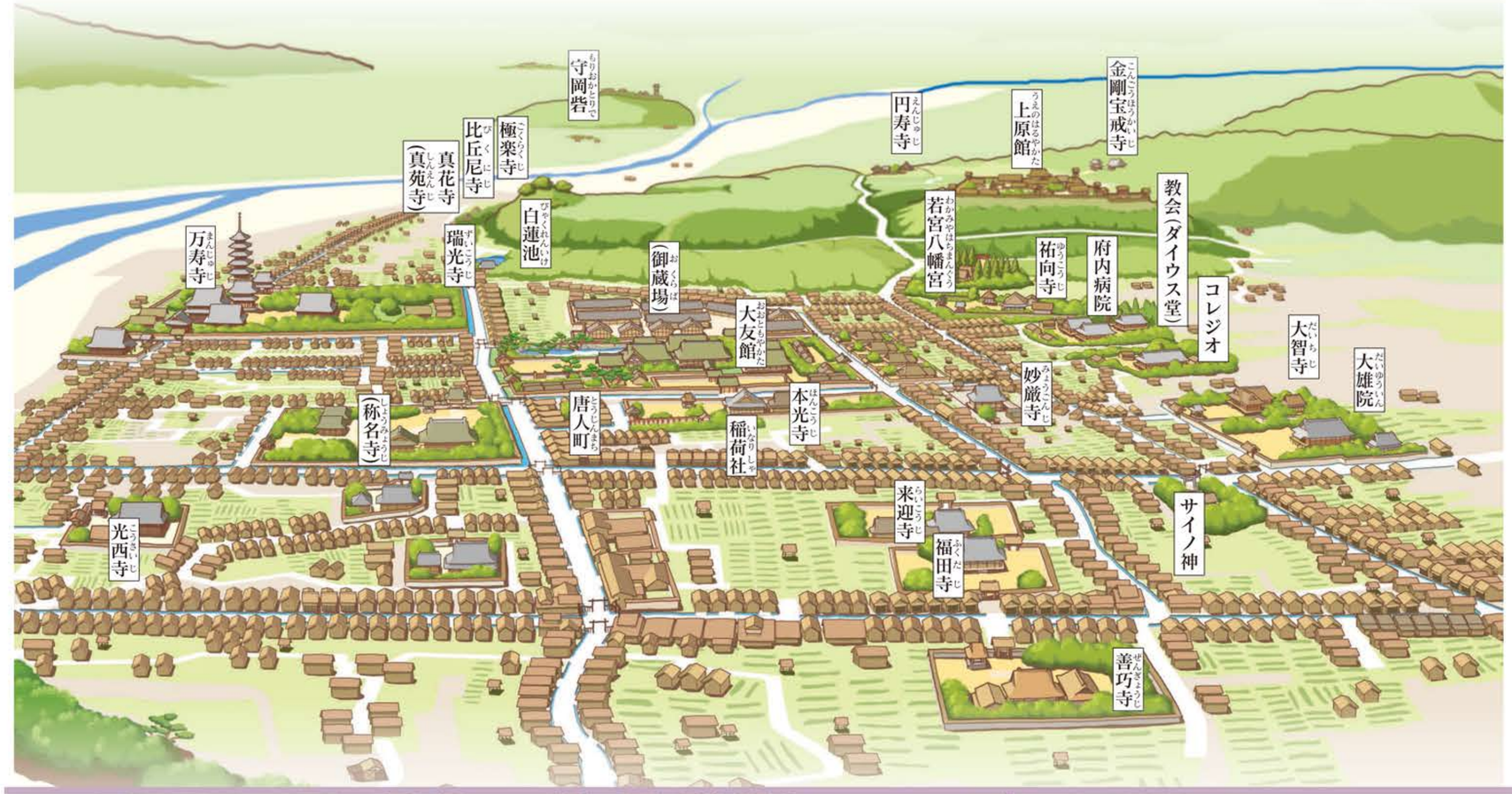
南蛮文化の薫るまち 府内

府内は、宗麟が積極的に南蛮貿易をすすめ、キリスト教を保護したことで、日本を代表する国際貿易都市へと成長しました。通りにはポルトガル商人や宣教師をはじめ、中国や東南アジアの人々が行き交い、まちには外国から多くの品物や様々な文化がもたらされました。



今から約450年前、宗麟の時代には大分川の西側、今の大分市元町、顕徳町、錦町、長浜町一帯に「府内のまち」がつくられていました。まちは、都のあった京都と同じように格子状に区画され、大友館を中心に多くの寺社と5000軒の家々が建ち並ぶ、当時九州最大の都市でした。

◀「大友時代 府内のまちの絵図」
府内のまちでは、アジアやヨーロッパなどの異国の文化が融合して、それまでの日本にはかった「南蛮文化」が広がっていきました。

中国や東南アジアの焼き物が発見

府内のまちには、「唐人町」という町名があったことから、多くの中国人が住んでいたと考えられます。また発掘調査から、中国や東南アジアの皿や茶わん、壷（砂糖や硝石を入れたと考えられる）など、大量の焼き物が発見されています。当時の府内は、堺（大阪府）や博多（福岡県）と並ぶ国際貿易都市でした。

最先端の医療で人々を救う

日本初の西洋式病院（府内病院）は、アルメイダによって建てられ、外科手術など当時最先端の医療で多くの人々を救いました。また病院の活動は、キリスト教信者のボランティアによって支えられていました。

◀府内病院復元模型
（大分市医師会立アルメイダ病院）